

早稲田商学第 337 号
平成 27 年 3 月

精神的世界と学の形成の諸問題 (6)

—— 精神にかかわる学の構造 ——

峰 島 旭 雄

1

精神的世界と学の形成に関する諸問題を、これまで多角的に論じてきたのであるが、ここでは、ひとたび端初にたちもどって、そもそもそのような学の形成の構造はどのようなものであろうかということを、全体観的に、考究することにしよう。

すでに述べたことがあるように、本題の表現の仕方からして、一つの意味を有している。それは、〈学の形成と精神的世界〉というのではなく、〈精神的世界と学の形成〉という表わし方である。〈学の形成〉が先でないことはいかなる意味を有しているのだろうか。

すでに三宅剛一『学の形成と自然的世界』という名著をわれわれは有している。ギリシアやカントを扱っているこの書の表題においては〈自然的世界〉が後であり、〈学の形成〉が先である。おそらく三宅教授は意識されなかったと思うのであるが、そこには、おのずから、〈学の形成〉の優先、つまり学の形成なるものが自然的世界に関しては客観的に独立しておこなわれうることが示唆されている、とすることができよう。もとより、そのような学の形成も、先んじて客観的に存在する自然的世界を前提せずには、不可能である。かかる客観的な自然的世界に向かって、とりわけ近代の独立した人間的知性が、「知は

力なり」の原理をたずさえて、探求の挑戦をおこなった結果が、自然的世界に関する学の形成である。このことはあらためて述べるまでもないであろう。しかしながら、自然的世界に関する学の形成は、それがひとたび成立し始めるや、いわば独立し、それ自体のシステムによって作動しつづけ、経過においてはむしろ、学の形成の独り歩きを見定め、検証する仕方、自然的世界が reference の対象となる。自然的世界は学の形成に対して一種の frame of reference となるのである。

これに対して、精神的世界における学の形成は対照的な特色を示しているといえる。〈精神的世界〉が先にあるということは、かかる世界においては、本来、自然的世界における学とおなじ意味、おなじ仕方、学の形成がおこなわれることは望まれない、ということを示唆する。つまり、精神的世界においては、なにもとりたてて〈学〉ないし〈学の形成〉は求められなくてもよいのである。〈精神的世界と学の形成〉を主題とする本論考において、このように、精神的世界における学ないし学の形成に対して否定的な言説を述べることは、自己矛盾ではないだろうか。

むしろ、ここで、そのようなパラドキシカルな事態においてあるのが〈精神的世界と学の形成〉であり、そこにさまざまな問題が生起する、とすることができるのである。精神的世界においては客観的な学は求められえない。少なくとも自然的世界における客観的な学——前述のごとき特性をもつ——は求められえない。その意味でまず、精神的世界においては「なにもとりたてて〈学〉ないし〈学の形成〉は求められなくてもよい」と言ったのである。しかし、そのことにとどまらない。精神的世界においてはそもそも〈学〉なるものが成立するのか、という根本問題があるのである。

なぜわれわれは自然的世界のみならず精神的世界に対しても学の形成を求め、あるいは、そのような営みをしないではいけないのであろうか。自然的世界に対しては、前述のごとく、「知は力なり」で、独立した人間的知性を用いて、

進んで自然に立ち向かってその秘密をあばき、そのうちに法則性を求め、これを組織して〈学〉を形成しようとすることは、ある意味では首肯しうところである。人間対自然、主観対客観、精神対自然という、一種の二元対立の図式のなかで、前者（人間・主観・精神）から後者（自然・客観・自然）へ向かって、後者を前者へ取り込む形で自然の客観的知識の体系、すなわち自然的世界において学の形成をおこなうことは、ごく自然の成行きであると言えるであろう。

これに対して、精神的世界は、可視的な自然的世界に対して、不可視的な世界であり、そのかぎりにおいて、少くとも顕在的な形では、ただちに学の形成がおこなわれえないのである。しかし、結局は、なんらかの意味で、それも自然的世界における学とはまた異なった意味において、学の形成がおこなわれるのでなければならない。かかる学のありようを解明すれば、前述の「なぜ」にも答えることができるであろう。

では、そのような〈学〉とはどのようなものであろうか。

2

すでに〈精神的世界〉という表現が〈学〉より先に出ていることの意味あいについて若干触れたのであるが、さらにいえば、精神的世界はそのような学の対象であると同時に、学そのものを生み出す母胎でもあるということである。学を生み出しつつみずからがその学の対象となるという独自の性格が、精神的世界の学、そしてその形成に、たえず纏綿するのである。つまり、精神的世界という不可視的な領野が自己自身を反省的に把握するとき、そこにおのずから展開するのが精神的世界の学なのである。

精神的世界といった場合でも、必ずしも一様なものではない。精神的世界は、アリストテレス、N. ハルトマン等を引用するまでもなく、反省的にとらえるならば、層をなして分岐している。少くとも、心的(心理的)な部分と、本来精神的な部分とを挙げることができるであろう。心的(心理的)な部分は、ただち

に予想されるように、心理学の対象領域である。とりわけ近来、心理学は実験心理学としてますます実験的方法ないし数量化の方向をたどっている。ここの取り扱いでは、そのような方向は、本来精神的な、つまり、精神そのものの営みから滲み出るような仕方で行き出される精神的世界の学の形成とは、異なるものであるといえる。なぜなら、実験的ないし数量化の方向にある心理学は、精神の外から、しかも精神の外なる方法を用いて、内なる精神の営みにかかわろうとするからである。

では、精神的世界の層において、本来精神的な部分というのはどのようなものであろうか。それは科学の成立する根拠（科学的な営みそのものではなく）、文学・芸術の成立する根拠、倫理・道徳の成立する根拠、宗教の成立する根拠、一般に人間精神の哲学的な営み（ときに形考上学的な営み）の成立する場であるということができる。それらの精神的世界の層においてそれぞれ学的な営みが見られる。その意味においては、人間は、とりわけ精神は、みずからを学的ならしめる本然的な欲求をもつということもできよう。

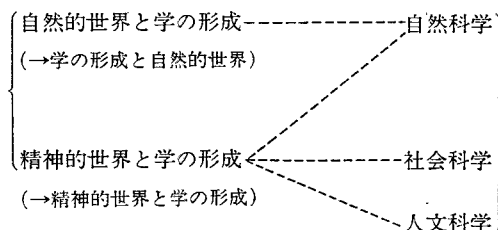
第1に挙げた科学については、若干補説する必要があるだろう。いまわれわれは、「科学的な営みそのもの」ではなく、「科学の成立する根拠」という表現を用いた。科学的な営みそのものとは、実験・観察、あるいは、さまざまな手段を用いての計算・数量的処理などを含む。しかし、じつは、かかる科学的な営みもまた精神にかかわりが無いとはいえない。まして、このような過程を経て、科学という学を形成しようとするとき、その根拠たるべきものは、十分に精神とのかかわりをもつ。ただし、この場合、科学とは、いわゆる科学の三分野である、自然科学・社会科学・人文科学のすべてにわたって、基本的に科学と称していることを、付言しておかなければならない。

自然科学の場合は、自然的世界と学の形成について言われたことが、ふたたび妥当することだろう。そこでは、いわば自然を鑑（かがみ）として学の形成がおこなわれるのである。けれども、そのさいも言及したように、精神・主観か

ら自然・客観へ向かって、後者を前者へ取り込む形で、自然の客観的知識の体系、すなわち自然的世界の学の形成がおこなわれる。つまり、やはり精神とのなんらかのかかわりがあるということができるのである。

社会科学や人文科学に関しては、それらが、それぞれ社会・人間の事柄を扱うかぎりにおいて、精神とのかかわりが生ずることは、あらためて言うまでもなからう。このように、自然的世界と学の形成、精神的世界と学の形成、自然科学・社会科学・人文科学は、いくぶんかの交叉を含みつつ、弁別されるのである。問題を整理して図示すれば、次のようになるであろう。

〔図 No. 1〕



3

次に、上述のような枠組の中で、もう一度、やや異なった仕方で、精神的世界と学の形成の問題を取り扱ってみよう。それは、常識・科学・哲学・宗教という諸段階において、精神的世界における学の形成を、発生論的に考察することである。発生論的とは、精神の営みを常識から科学へ、科学から哲学へ、哲学から宗教へという一種の形成過程の面から把握しようとすることにほかならない。

常識の世界は精神的世界の一面であり、しかも端初的な一面であるといえる（ちなみに、ヘーゲルの〈精神現象学〉でいえば、それは感覚的確信に相当しよう。）たとえば、われわれは素朴に、太陽は東から昇る、と言う。これこそ、もっとも

常識的に言われることであって、精神的世界の一種の前提、黙認という形で、われわれの世界で妥当するのである。妥当するのは精神的世界においてであるが、それはやがて自然的世界へも擬似的に適用され、常識的には自然的世界もまたそのようであるという印象を、われわれにあたえることになる。いまの例でいえば、太陽が東から昇る、ということが、あたかも自然現象そのものであり、自然現象の法則さえもそこから引き出せるように見えさせるのである。いうまでもなく、太陽が東から昇るということは、科学的事実ではなく、地球の自転・公転の具合で、われわれが東西南北と名づける名称を用いれば、そのように見えるにすぎないのである。

ここで、科学の効用性（科学そのもののレベルでいえば真理性）についていくぶん考察してみよう。すでに述べたように、科学は常識の見せかけを実証的にあばく役割を果たすといえる。（しかし時に、常識が科学の証明すべきことを的確に言い当てていることもありうる。）そして精密な実験・観察、計算・数量化によって、科学的事実の確証、科学という学の形成をおこなう。ここで科学とは、いうまでもなく、自然科学である。科学の常識に対する関係は種々様々であるだろう。前述のごとく、常識の見せかけをあばき、科学的に真である事実を示す役割も果たすであろうし、常識が科学の証明すべきことを的確に（あるいは部分的に）言い当てている場合には、そのことを証して（あるいは補正して）、常識を科学のレベルにまで高めることをなすであろう。

常識と科学との関係がこのようであるとして、科学と哲学との関係はいかなるものであろうか。哲学は根本的な原理に関して、これを方法論的に徹底させ、科学、そしてその成立根拠を精神的世界の一員たらしめる役割をもつ。ヒュームは消極的な仕方ですることをなしたということが出来る。いうまでもなく、ヒュームは、自然の因果律——自然科学が学の成立の根拠としているところのもの——の妥当性に疑いをさしはさみ、それを主観の単なる習慣のレベルにまで引き下げたのである。ヒュームのこの懐疑は、科学ないし科学的原理の不確

かさをあばいてみせる意味で、一種の効用性（哲学に即していえば真理性）を有する。哲学は全体知を標榜する。したがって、トータルに真理でないものにはあくまでも疑いをさしはさむ。もっとも哲学自身、そのようなトータルな真理性を理念として追求しているのではあるが。

精神的世界における精神の階層という視点からすれば、常識から科学へ、科学から哲学へは、表層から深層への深化であるといえる。それは、ものごとを現象面、あるいは合理的に切断しうる局面では見ないで、その本質面、あるいは不可知的な局面で見ようとする欲求と、表裏一体をなしている。かかる欲求そのものが精神の事柄である点に注目すべきである。精神的世界においては、探究と探究されるべきことが相応し密着しているのである。あるいは次のように言うこともできよう。かかる密着の度合が精神におけるその層を決定する、と。

常識においては、そもそもこのような密着の度合そのものがいまだ意識化されていないといえるであろう。それが精神の事柄でありながら、知るものと知られるもの、主観と客観の弁別とその相互関連は意識にのぼらないのである。これに対して、科学の場合は、そのようなことが意識されてはいる。しかし、すでに述べたように、その場合の意識のあり方は、あくまで客観に追随するものであり、そのかぎりにおいて、客観を主観のうちに取り入れて、学の形成をおこなうものであった。これに反して、哲学の場合は、さらに精神の層のうちに沈潜し、知るものと知られるもの、主観と客観という二元的な関係そのものを問いただす。すなわち、たんに密着の度合が深まるのみでなく、その度合そのものを反省的にとらえようとするのである。

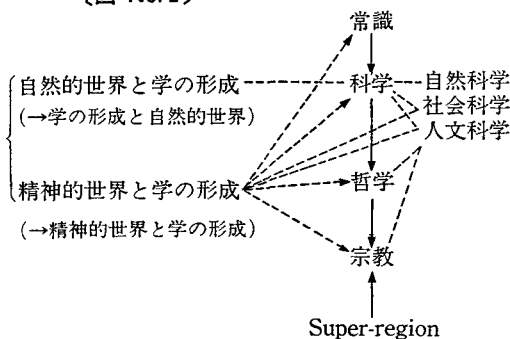
4

では、すでに挙げたうちで最後にある宗教については、いかがであろうか。ティリッヒの言説を引くまでもなく、宗教は一切の文化の営みの深みにある。〈文化の神学〉を唱えたティリッヒの場合、宗教は他の文化構成要素である科

学・道徳・芸術の三つに並ぶものでなく、それらを通じて〈深み〉においてあり、人間の究極的関心であるとされる。これを、ここでの表現をもっていいあらわせば、常識から科学へ、科学から哲学へと深まった精神の次元、精神的世界の層は、いまや宗教というもっとも深い精神の次元、精神的世界の根源的な層へ到達したといえる。宗教は、このように深みへと到る精神の営みそのものを問題視する。はたして人間の有限的な能力にそのような力があるのかどうか。人間の精神的な営みも、それが自力であるかぎり、限界がある。かかる有限性をも突破して、前述のごとき究極的な深みに到達するには、精神的世界がそれ自身を越えるような領野からの〈視〉と、究極的なものへ導く〈力〉とが必要となる。精神的世界内での密着の度合を越えて、そのようなある種の超越的な世界と精神的世界との密着の仕方が問題となる。

かくして、われわれは常識のレベルから、科学、哲学、宗教とたどり、精神的世界の層を深く掘り下げ、ついには、それをも包む領野まで、考察をいたらしめた。これらをも加味して、もう一度図示を試みよう。

〔図 No. 2〕



上図で宗教についていえば、常識がいわばアウフヘーベンされて科学となり、科学がまた別な意味でアウフヘーベンされて哲学となるとすれば、そこには精神のひだともいべきものが厳存するのであり、宗教の領野について、かかる局面からなお若干説述したい。

宗教の場合には、宗教学はこの場合の学の形成に適合した名称ではない。ここでは宗教哲学がこのレベルをあらわす適合した表現であるといえる。宗教学はあくまで *science of religion* であって、人文科学あるいは社会科学の分野に属することになる。ここでの宗教＝学はすでに哲学の領域を突破したものであって、宗教哲学でなければならないのである。

宗教哲学をこのような深みに据える試みは、他に類例がないわけではない。田辺元は『哲学通論』において、芸術哲学と宗教哲学に大きな比重をおいている。ヴィンデルバントは、此岸的価値としての真善美に対する彼岸的価値としての聖（宗教の追求する価値）に総合的な役割を付与し、前述のティリッヒも、深みにおいてある宗教に真善美の価値を総合する働きを認めている。宗教哲学はまさしくそのような機能を解明し、精神的世界においてこれを定位していくものでなければならない。

すでに科学への言及にさいして、それが常識の欠を補うこと、常識の見せかけをあばくことを役割とすると述べるとともに、ときに常識が科学の説くところと符合する場合もあることを指摘した。哲学もまた、科学の諸原理を疑いつつ、意外にも常識に回帰する面をも有するといえる。とりわけ道徳哲学（＝倫理学）についてそのことが言える。「うそをつくなかれ」は道徳的常識である。カントもまた、『道徳形而上学の基礎づけ』においてこの点を配慮して、道徳哲学（＝倫理学）の批判的基礎づけを遂行している。

そして宗教の場合も、あるいは他の象眼の場合にもまして、常識への回帰が言われるであろう。〈平常底〉、「柳は緑に、花は紅に」である。むしろ、かの超越的な領野からの声を聴いた者においてこそ顕著にかかる回帰が生起するのである。深みにいたればいたるほど、表層と逆対応的に結びつくのである。したがって、常識から科学へ、科学から哲学へ、哲学から宗教へは、その逆の方向もありうるとともに、それぞれ、常識から（科学をとばして）哲学へ、そしてその逆。常識から（科学・哲学をとばして）宗教へ、そしてその逆。このように、

いわば重々無尽に相互に交錯する構造を有するといえるのである。

なにゆえこのような交錯する構造なのかというに、そもそもそれはかかる諸学問領域の基盤となった精神的世界がそのような交錯性を有するからである、と答えなければならない。精神的世界は階層をなすと述べたが、ここでやや修正を含めて再説すれば、かかる階層それ自体が決して固定的なヒエラルヒーをなすのではなく、相互滲透的な全一的構造をなしているのである。そのことが、常識から一足飛びに宗教へ、あるいは逆に、宗教から一足飛びに常識へというかわり方を、可能ならしめているのである。(固定的なヒエラルヒーをなしているのであれば、どうしても常識から科学を経ないと哲学の局面が現われないということになるであろう。)

5

以上に略述したような、精神的世界の構造、ならびにそこでの学の形成ということ、あらためて顧みるならば、次のように言われうであろう。

まず、それぞれの階層に対応していえば横ひろがりになんらかの種類の精神的な意味での学の形成が見られるということである。次に、それらをいわば縦につらぬいて、いま述べたような重々無尽のあり方で、相互滲透的な学の交錯する事態が見られるであろう。精神的世界においては、学はひとたび自己自身を形成するとともに、自己自身を否定し、自己自身をのりこえる、不断の営みをつづけるのである。それはいわば構築と脱構築との無際限の過程であるだろう。

このような横と縦との限りない生の営みに相応する学の形成を、つぶさに、精神自体がとらえ、これを記述し表明するところに、精神的世界における学の形成が見出されるであろう。この意味においても、かかる領域における学の形成は、あくまで、まずもって精神的世界があり、そこからおのずから学の形成が現成するものでなければならないだろう。